

# 朝鮮総督府「国語読本」と国定「国語読本」を比較して見えるもの

～挿絵のみの教材に見られる特徴～

## 조선총독부 “국어독본”과 국정 “국어독본”의 비교

### -그림페이지의 특징-

留学生センター 准教授 上田崇仁

#### 要約

조선총독부가 편찬한 국어(일어)독본과 국정국어(일어)독본에는 글자가 없고 그림만 있는 페이지가 있다. 이 페이지를 어떻게 일어교육현장에서 이용했는지 상세한 내용을 아직 분명하지 않지만, 그 페이지수나 그림의 소자가 다른다는 것이 하나의 단서가 된다고 생각한다. 본고에서는 그림페이지의 의미를 조선총독부편찬 국어독본과 국정국어독본을 비교하면서 고찰했다.

#### 0.はじめに ～ 問題の所在

本稿は、2007年12月16日に九州大学で開催された国際シンポジウムにおけるワークショップでの発表と、同年12月26日に玉川大学で開催された国際シンポジウムでパネリストとして発表した内容をもとに、後者で使用した発表概要を加筆修正したものである。以下では、朝鮮総督府編纂の「国語読本」(以下、朝鮮読本)と国定「国語読本」(以下、国定読本)を比較した結果を踏まえて、二つの仮説を提示したいと考えている。

それに先立ち、朝鮮読本と国定読本との比較を行った上田(2000)の検討内容を元に問題点を整理しておきたい。ここで筆者が行った検討内容は次の2点であった。

- ① 朝鮮読本と国定読本で取り上げられた教材の異同
- ② 朝鮮読本に関しては全面改訂の狭間に行われた部分改訂の意図と内容

①についての検討を進めるうちに、明らかになった問題があった。それは、「何をもって異同を判断するのか」という点である。この問題点が生じるのは、異同の基準が複数の側面から成り立っているため、一義的には整理できないことが原因である。つまり、ある教材の異同を検討する場合、

- α 表題が同一かどうか
- β 本文が一字一句同一かどうか
  - 漢字、仮名遣い、句読点の位置
- γ 挿絵が同一かどうか
  - 挿絵の位置が本文と比較して同一かどうか
- Δ 教育しようとしている文化的、思想的内容が同一かどうか

といった点からの側面の検討が必要となる。厳密に言えば、国定読本と朝鮮読本とが採

用していた正書法（仮名遣い）が異なっている時期、それが適用されていた巻には「同一」のものは存在しないのである。

そのため、上田（2000）では、精密な比較を行うことをせず、傾向を調べるにとどめて、単に、αの「表題が同一かどうか」といった点に絞って比較作業を行った。巻を無視した結果であり、β～Δについてはまったく配慮していないものなので、参考程度にしかならないが、次のグラフのような結果が得られた。

乱暴に言えば、3.1 運動を期に同一内容はいったん減るものの、その後は増加し続け、最終的な朝鮮第五期と国定第五期の読本のタイトルでは、その70%近くが一致するようになる。

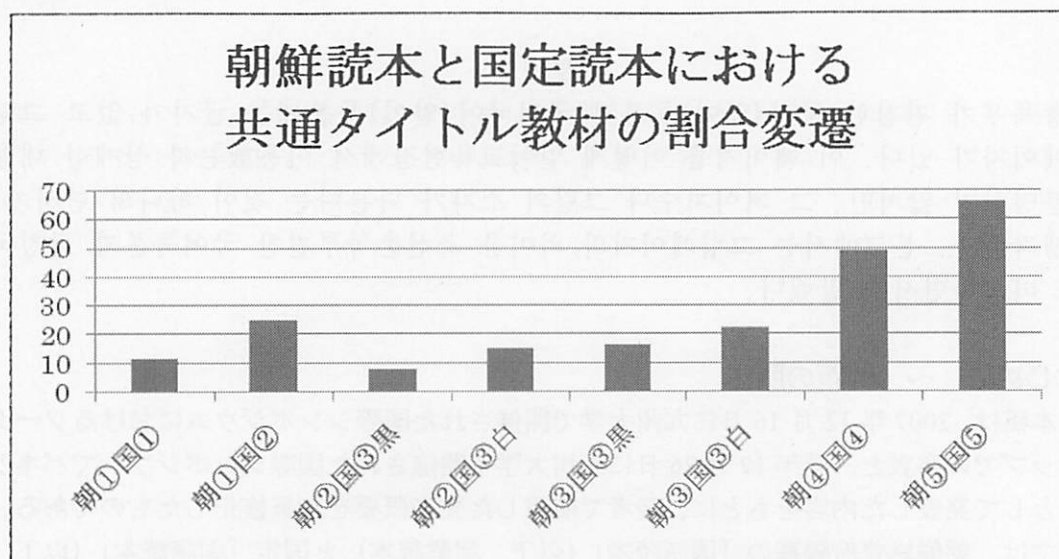


図 1 上田（2000）より再掲

②については、1923 年から 1944 年まで毎年何らかの改訂が行われていたことが明らかになった。改訂内容の分類は行っていないが、句読点の位置が変わるもの、動詞の活用形が変わるもの、文字の種類（漢字、ひらがな、カタカナ）が変わるものといった「国語」という言語にかかわる改訂と、社会的変化に即したもの（料金の改定、鉄道網の発達、事件事故など）にかかわる改訂、挿絵において総督府の政策に即した改訂が行われていることが明らかになった。

年代	内地	朝鮮
1904（明治 37）年	国定第一期	
1909（明治 42）年		旧学部期学徒本
1910（明治 43）年	国定第二期	同訂正本
1912（明治 45）年		朝鮮第一期
1918（大正 7）年	国定第三期	同部分改訂
1923（大正 12）年		朝鮮第二期
1930（昭和 5）年		朝鮮第三期
1933（昭和 8）年	国定第四期	
1937（昭和 12）年		同部分改訂
1939（昭和 14）年		朝鮮第四期
1941（昭和 16）年	国定第五期	
1942（昭和 17）年		朝鮮第五期

表 1 上田（2000）より再掲

この 2 点は、日本が植民地とした朝鮮において「国語」という言語教育を通じて何をしようとしていたのかを顕著に示すものである。すなわち、タイトルの一致率の上昇は、教育内容の統一という側面からのアピールであり（朝鮮側の一方的な変化である）、改訂内容

が総督府の政策の反映だけではなく言語教育にかかわるものを含んでいるのは常に「国語」という言語の定着、普及に腐心していたことを示しているものである。

この2点から導き出した結論の一つに、以下のものがある。

朝鮮読本は、朝鮮第二期に入った時点で「内地」型の読本へと大きく姿を変えた。

朝鮮第三期は基本的に朝鮮第二期を継承した読本と捉えられる。しかしながら、朝鮮第三期は日本の内外で情勢の変化が著しい時期に当たり、それに伴った部分改訂の多さが特徴的である。朝鮮第四期は制度上内地と統一されたことから、読本に共通する教材が顕著な増加を見せている。朝鮮第四期と朝鮮第五期に見られる特徴は、朝鮮独自の教材の減少である。これは、旧学部期や朝鮮第一期の語学教育的側面から変化したことを示している。具体的には、朝鮮独自の仮名遣い法の導入、「内地」との共通教材の少なさがそれを示している。(以下略)

傍点を付した部分、つまり、初期の朝鮮読本が語学教育的であり、その後、語学教育的な側面が変化した、換言すれば語学教育的要素が減少したという結論を導いている。

もう一つ、教科書の構成上の特徴を述べておく必要がある。

国定読本は、第一期（「イエスシ」本と呼ばれる）と第二、第三、第四期、国民学校で使用された第五期との3つに大きく区分できる。第一期と第五期は音声言語を重視したとされ、第一期は発音の混同しやすい語彙を冒頭に取り上げている。第五期は、今回の発表の中心となるが、挿絵のみで構成された教材をはじめ取り入れている。

朝鮮読本は、挿絵のみで構成された教材を取り入れたのは第三期からで、国定よりもかなり早い。

以下では、この冒頭に存在する挿絵のみの教材を取り上げ、二つの仮説を提示したいと考えている。

今回の発表の扱う問題点は、以下の1点に絞られる。

上田（2000）では、通時的に朝鮮読本の本文を比較することで語学教育的教材の減少を指摘した。本文の存在しない部分、すなわち、挿絵のみで構成されている教材では、語学教育的教材の減少という事象が同様に見られるのであろうか。

なお、今回の発表では挿絵のみの教材が盛り込まれるようになった時期、朝鮮読本では第三期以降を、国定読本では第五期を対象とする。

## 1. 「語学教育的」という視点

「国語」という科目は、言語を扱う科目である以上、言語の教育が行われていると考えるのが妥当であろう。非母語としての教育であるため、母語としての教育とは異なっている部分があるとも考えるのも妥当であろう。

教科書を見る限り、朝鮮の独自色が濃いのは初期の教科書であり、先に述べたように時代が進むにつれ、内地との一体感が増してくる。

この事実を踏まえて一つ資料的に限定しておきたいことがある。

「語学教育的」という視点は、教科書を分析する上で妥当な視点なのだろうか。「語学教育的」の対極にあるのは「国民精神教育的」とでもなるだろうか。語学教育的であるというのは、その教材が言語そのものの特徴を体得するために製作されているものとは

定義しておきたい。言語学習の目的は言語そのものを獲得することではなく、その言語使って活動を行うことにある。つまり、ある言語の教科書を分析する際に、「語学教育的」であるか否かという議論は、初習段階の教科書の分析に用いるべきものであって、その段階を超えた場合は、程度の差こそあれ、あまり役に立つ議論ではない。学年が進行するにしたがって、教材ではこれまで学習した文型や語彙でどんな表現の文章が読めるか、作れるかに重点が移るためである。

そこで、今日の報告の中で言う「語学教育的」という議論は、原則として1年生の前半に使用する巻一の冒頭部分に限定して行うこととしたい。

## 2. 朝鮮読本における挿絵教材の位置づけ

これまで、教科書の改訂がいわば、「内地化」することで、語学教育的要素が減り、国民精神教育的要素が増えると判断していた。その証左の一つが、第1巻の冒頭部分の変化である。

旧学部期とした併合直前のものは、漢字語彙の音読みから入り、第一期の教科書では自動の身体部位の名称を与え、第二期、第三期では韻文から教えるようになっている。そして、第三期以降、教科書の冒頭は挿絵だけのページで構成されている。この挿絵ページをどう評価するかが「語学教育的」か「国民精神教育的」かのポイントである。

『朝鮮に於ける国民学校の実践原理』（全州師範学校附属小学校編・日韓書房 1941 年）ではこの挿絵ページについて以下のように書かれている。

### 一、絵図教材の特質と指導上の注意

#### 特質

- 1、絵図のみによる表現で文字に類する一切のものが使用されてゐない。
- 2、素材的に極めて豊富、しかも児童の生活に極めて親近性のあるもののみが表現されてある。
- 3、国民意識を高揚せしめる如き素材が頗る豊富に用意してある。
- 4、児童生活の時間的経過と系統性が重視せられてある。
- 5、内鮮一体的な色彩が極めて濃厚である。

#### 注意

- 1、ことばを与へること、即ち聴会力の修練を本体とするものである。話し方の修練を決して意図するものではない。
- 2、しかし、右の教育も常に児童の国語生活の自然的姿態に立って考慮、実施されなくてはならない。
- 3、用語・表現形式・言語の難解度・整理せられたる発言等指導上十分に注意すべきである。
- 4、次に来るべき文字教材への自然的移行を十分に企図せねばならない。

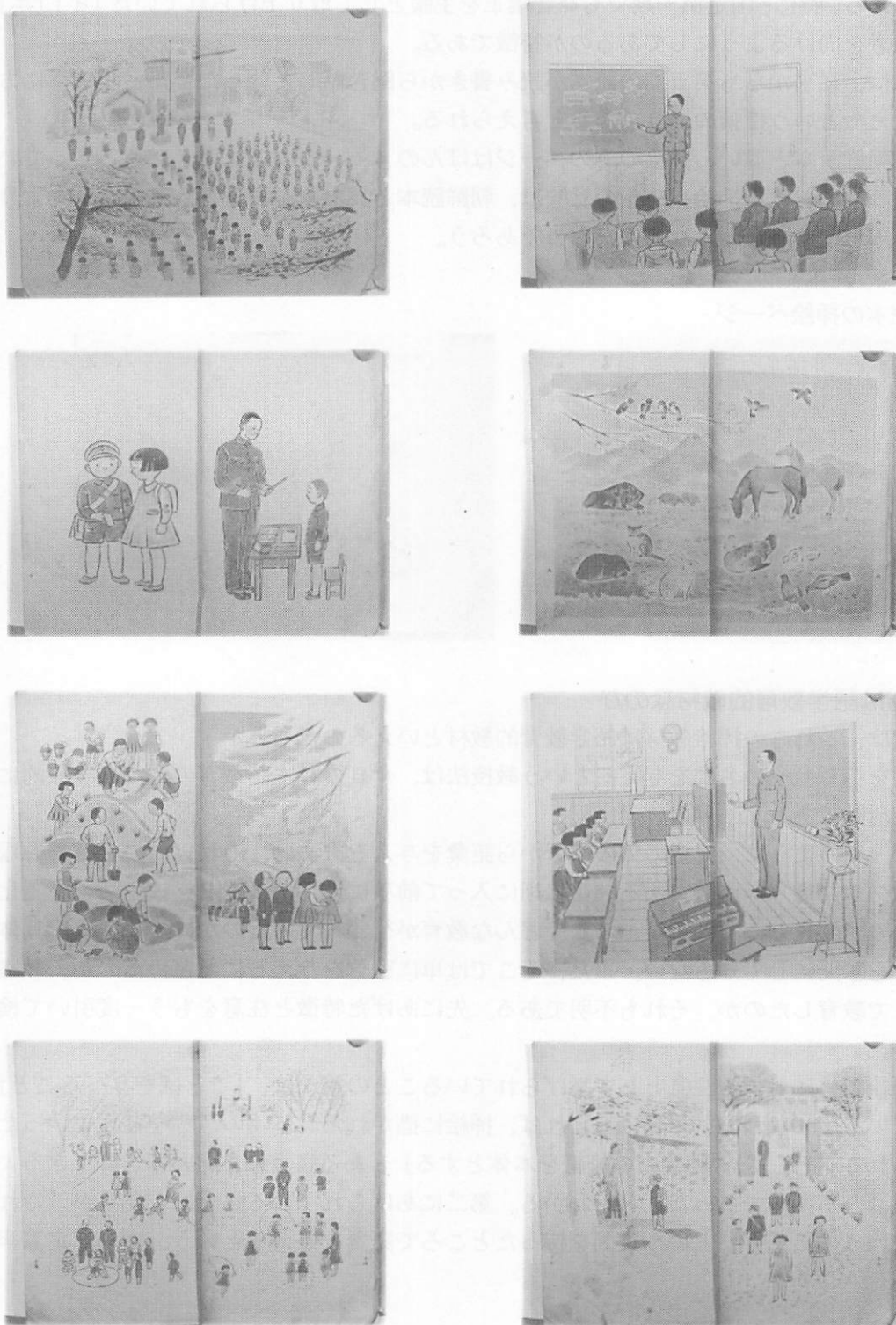
（原文はすべて旧漢字）

特質に上げられた第3点と第5点を見ると、国民精神教育的要素が盛り込まれていることがわかる。

この挿絵だけの教材が採用された第三期の読本では、教科書に盛り込まれている文字教材に、学校で使うことが予想されている語彙がほとんど含まれていないということである。この点については、『文教の朝鮮』3月号（1934年）に「普通学校入学当初児童の生活用語」という文が掲載されており、初めて日本語に接する朝鮮人児童の学校生活を「国語化」す

るために必要な語彙が示してある。話がさかのぼっていくが、朝鮮第二期の編纂趣意書には、「普通学校では入学当初に三週間、主として学校における日常用語を教授することになってゐる。」と示されているように、学校生活に必要な語彙を教授する時間が設けられていたことがわかる。この時間に利用するための挿絵が第3期から採用されたと考えるのが妥当である。

図 2 朝鮮読本の挿絵ページ





### 3. 国定読本の場合

2では朝鮮読本に対する分析を行ってきた。それでは、国定読本はどのような様子であったのだろうか。

国定読本は、第五期になってはじめて冒頭に挿絵のみの教材が組み込まれることとなった。挿絵のみの教材の採用は、朝鮮読本のほうがはるかに早い。これは一体どういう理由だろうか。国定読本の教師用書『ヨミカタ 教師用』には、その挿絵を手がかりに体操の様子を取り上げ、「一、二・・・」と号令をかけるところへ導き、発音矯正を行うように指示してある。特に、国定第一期でも発音矯正を主眼として取り上げられていた「イ」「エ」の音に注意を向けるようにしてあるのが特徴である。

この点は、従来からも第五期の読本が読み書きから聞き話しといった音声言語重視に方向性を変えたという指摘の通りであると考えられる。

また、朝鮮読本と違い、挿絵のみのページはほんの4ページ、2見開きにとどまっている。国定読本における挿絵ページの意味は、朝鮮読本と異なり、語彙導入という目的よりも、発音矯正にあったとみなすのが妥当であろう。

図3 国定読本の挿絵ページ



### 4. 挿絵教材は語学教育的教材なのか

それでは、これらの挿絵教材は語学教育的教材といえるのだろうか。

具象物を示し、その名前を与えるという教授法は、今日の日本語教育の場でも一般的に見られる活動である。

朝鮮第一期のように、児童の体の部分から語彙を与える方法は、それ以前の台湾でも取られ、教材の共通点が顕著である。第二期に入って前項に述べたような学校生活を国語化するための時間をとっているが、ここでどんな教育が行われていたのかについては、具体的な資料を寡聞にして知らない。また、そこでは単に語彙を与えるにとどめたのか、教室内用語まで教育したのか、それも不明である。先にあげた特徴と注意をもう一度引いて検討したい。

この挿絵教材に対する注意として挙げられていることの第一は、「ことばを与えること」とされている。すなわち、単純に考えれば、挿絵に描かれた具体物の名称を与えていったと考えられる。そして、「聴会力の修練を本体とする」とあるように、聞いて理解できるようにすることが主体であったこともわかる。第二にあげられていることは、児童が「これはなんというのだろう」という疑問を持ったところで語彙を与えるという、極めて定着率

のよい活動を示唆している。さらに第三では難解度に注意するように指示してある事から、文になった形での教授は教室用語を除いて行っていなかったのではないかと推測される。つまり、語彙を与えるという語学学習の基本的活動を行っていたわけで、十分に語学教育的な教材であったと判断することができる。

一方の国定読本については、挿絵教材の利用が発音矯正において使用されたことを考えれば、語学教育的教材と判断できよう。ただし、その挿絵を見て児童がいろいろな感想を述べるという部分では、語学教育というよりも、文化などを中心として国民精神教育的教材とみなすこともできる。

## 5. 効果的という視点 ～朝鮮読本を取り上げて

4で、朝鮮読本に関して挿絵のみで構成されている教材も十分に語学教育的なものであるといえるという見解を出したが、そこで芽生える新たな問題が一つある。それは、従来、語学教育的であると判断していた第一期の教科書と、挿絵のみの教材がはじまった第三期以降の教材とではどちらが効果的であったかという問題である。

問題点を整理しておきたい。単純に語彙を与えるという活動に限定して、朝鮮での教科書は3つに分類できる。

第一のグループは第一期に示されるように、身体部位から導入するもの。

第二のグループは第二期に示されるように、教科書から離れて日常用語を教授したもの。

第三のグループは第三期以降に見られるように、冒頭に挿絵のみの教材が採用されたもの。

このうち、第二のグループについては、現在の段階で具体的な活動が不明なので除き、第一のグループと第三のグループを比較してみたいと思う。

始めて「国語」を学ぶ児童にとって、身近なものから教授するという手段は極めて正統的な活動であると考えられる。その目的が生活の国語化にあるためである。そもそも生活の国語化は、児童の日常生活を「国語」だけで行えるようにするというものが究極の目的

である。第一のグループは、その目的を達成するために、身体部位から語彙を導入する。一方の第三のグループでは、挿絵を利用して、学校生活に限定した時系列的な配置によって導入活動を行おうとした。時系列的な配置は、児童が一日の流れを学校を中心にイメージすることが容易で、効果的であったと考え

られる。また、初めて学校で学ぶ児童にとつ

図4 朝鮮第一期読本の冒頭

ては、学校生活に関する語彙は、朝鮮語の語彙を持つ、あるいは持っている可能性が低く、国語でしか表現できない語彙を導入するといった点で極めて巧妙かつ効果的であったと考



えられる。

言い換えれば、児童はうちへ帰って学校の様子を家族に説明する際に、そこで交わされる文は朝鮮語であっても、語彙は国語でしか存在し得ないという状況が生み出されるわけである。国語でしか表現できないもの、その積み重ねが国語らしい国語を身に着ける第一歩であり、これは、今日、留学生に日本語を教える現場でも、翻訳することなく日本語だけで考えることを目的として教育することと同じである。

そう考えると、第一のグループの身体語彙では、朝鮮語の語彙を知っているために、常に翻訳するという活動の存在を否定しえず、ひいては、国語らしい国語を身につけるといふ点で非常なマイナス面を持っていたのではないかと考えられるのである。

## 6. 結論 一仮説の提示

上田（2000）では、朝鮮読本においては、改訂を経るごとに語学教育的教材の要素が減少するとみなしていたが、それは文字教材においてにとどまり、全体としては、より巧妙かつ効果的な語学教育の実践を目指していた可能性が否めないことがうかがえる。もちろん、どの発音から教えているか、どの文字から教えているか、どの文型から教えているか、といった面での分析を経ない限り、全体的な語学教育的要素の増減を断言することは困難である。

国定読本においては、第一期と第五期には語学教育的な配慮が濃厚であるが、これは両者とも音声言語を重視したためであると考えられる。音声言語の指導が、第一期では文字で示されていたのに対し、第五期では挿絵を手がかりに児童の自発的な発言を引き出した上での指導に結びつけるという配慮があり、より効果的であり、实际的であったと考えられる。

結論として、2つの仮説を提示したい。

一つは、国定読本と朝鮮読本が第五期になって、ともに挿絵のみで構成された教材を冒頭に置くという形になったのか、という疑問に対する仮説である。

国定読本と朝鮮読本では、挿絵教材の配置理由の背景と意図とは大きく異なっていたと想像できるが、学習者である児童が教育内容を強制されているという気持ちを抱かず、自分の関心を持ったものを与えられるという形で、学習動機を高め、定着率を高める工夫であった点では共通しているのではないだろうか。

もう一つは、朝鮮読本に関するもので、語学教材としての視点から見て教科書は進歩していったのか、という疑問に対する仮説である。

少なくとも、語彙の導入と定着という側面からは、版を重ねるごとに、翻訳させない語学教育という点では、巧妙かつ効果的に変化していつている。また、そこで扱われる語彙も、日常生活から学校生活へと場面を狭くすることによって、よりコントロールしやすい形、換言すれば国語で話さなければならない状況ではなく、国語で話せる状況を与えるという形に変化しているといえるのではないだろうか。



参考文献

上田崇仁 (2000) 「植民地朝鮮における言語政策と「国語」普及に関する研究」(平成 11 年度  
広島大学大学院博士学位論文)

上田崇仁 (2000 『『国定読本』と『朝鮮読本』の共通性』『言語と植民地支配』植民地教育  
史年報 0 3 皓星社)